

平成二十二年 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。

2 〔一〕～〔五〕の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

〔一〕 設問と解答欄は、解答用紙(全2の1)にある。

〔二〕 次のA～Cの形に合う四字熟語を、各々二つずつ作りたい。

二つの()のうちの二つには左の漢字群から選んだ一字を使い、もう一つの漢字は自分で考えて答えよ。

A 一()一() B 自()自()
C 不()不()

「長・作・進・眠・賛・死」

〔三〕 次の子供の作文を読んで、後の問いに答えよ。

「あんたべべたでもいい(1)、あんなに笑いながら、走ったら不真面目よ。」運動会(2)終わったあとで、お母ちゃん(3)僕に言った。お母ちゃん(4)僕の心というもの(5)ぜんぜんわからないのだ。

いま涙がこぼれたら、えらいことやと思った(6)、まゆげさげるみたいにして、鼻のところを力^aをいれて、がまんして、あんなに一所懸命に走った(7)、お母ちゃんは、(8)顔やいうてはる。もうちよつとで僕は、ほんまに、(9)ところやった。

問一 二重傍線部「べべた」の意味を漢字三字で答えよ。

問二 () 1～5の中で「が」以外の一字が入るところが一つだけある。その番号を答えよ。

問三 傍線部 a 「涙がこぼれたら」とあるが、「涙が」を「涙を」に、b 「力をいれて」とあるが、「力を」を「力」に、かえればどうかわかるか、答えよ。

問四 () 6・7に適するひらがな二字をそれぞれ答えよ。

問五 () 8・9に適する二字の語を、それぞれ自分で考えて答えよ。

問六 右の作文の題は「かけっこ」である。「かけっこ」という語の成り立ちと同じものを、次から二つ選び番号で答えよ。

- 1 ならめっこ 2 おにごっこ 3 いたずらっこ
4 とりかえっこ 5 いじめっこ

〔四〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(1～6は段落番号である)

1 山の自然教室で、蛾と対面したときの驚きのご様子が気になつてこの手紙を書きました。小さな一匹の蛾を怖がって逃げまどうあなたの姿を見て、なぜそんなに蛾が怖いのだろうかと首をか上げてしまいました。あなたが何のためらいもなく撒いた虫殺しのスプレーの匂いの方が私にはよほど気味悪く思えました。もちろん、世の中には気味悪い昆虫や本当に怖い動物もいます。しかしそれらのほとんどのものは、ただ気味が悪いだけで、まったく無害か、あるいはその害はきわめて稀に起こるだけです。

2 私たちの周囲には、目に見えない、あるいは隠された恐ろしいことや気味の悪いものがたくさんあります。水や空気の汚染、アレルギー体質をもたらし、生物のホルモン系を乱すとされるいわゆる環境ホルモンとなる多くの化学物質の放出、人が人を簡単に殺してしまう戦争、広大な森林の破壊、このような恐怖のなかに身を置いていることは怖くないのですか。本当に怖いものが何かわかってくれば、私たちが感情的に虫や動物を拒否することが②「本当に怖いもの」をかえってはびこらせているのではないかと③いう反省も生まれてくるはず④です。このような考え方、配慮を必要とする身の回りの生き物は蛾だけではありません。河川からはユスリカをはじめ、多くの水生昆虫が羽化してきます。川の自然を大切にという声を素直に受け入れた場合、川沿いの家々の灯には多くの昆虫が集まることを許容することが求められているのです。自然が保たれた川からは、トンボや蜚だけが羽化してくる訳ではありません。川に殺虫剤等を散布して昆虫を皆殺しにするのではなく、一枚の網戸によってこれらの昆虫との共生を図る道があることを忘れてはなりません。

3 一種類の蛾の生存のためには、多くの条件が整っていないければなりません。幼虫の食物となる充分な量の食餌植物、羽を休める植物群落はもとより、その蛾が増えすぎて食餌植物との均衡を破ることがないように、その個体数をチェックする捕食者や寄生者なども無視できません。このように考えると一種類の蛾の安定した生存のためには自然のセットが完備していなければならぬことに気がつきます。あなたの目の前のその蛾の背後に、豊かな自然の影を見てほしいのです。灯に一匹の蛾も集まらなくなったとき、それを滅びゆく自然が発している赤信号と感じてください。

4 小さな子どもはトカゲやカエルを平気で手づかみにします。母親の気味悪からやめなさいという叱正が、このような動物を

なかったし、私の家は医者だということで田舎町の純朴な人たちは尊敬していてくれた。そういうわけで、小さな我々の仲間までが、私をへんに畏敬する風があった。それに私は、いつもひとりで遊んでいる無口な子供ではあったし、誰も用事の時の外には、気軽に口を利いてもくれなかったのである。それを、私はふだんは大して不幸にも思っただけではない。しかし、今日こうして、お前の友達は誰々だと問われると、すぐに答え得る名のないのを [1] 思っただけです。その上、私は先生に向かってきつぱりと友達はひとりもないと書くことは出来なかったのです。どうしてだか知りません。いろいろと考えた末で私は、教室における自分の座席のぐるり四五人の子供の名を順々に書き並べたのです。何故かというのに、その子供たちが、そういう位置に置かれた自然の関係として、自然と、最も多く私と口を利く機会が多かったからでした。その時間が過ぎてしまつて、自由な時間が来た時、子供たちは、今のさっきの先生の質問をさも重大な事件のように話し合っていました。彼らは皆、人々に、俺はお前のことを書いたというようになことを言い合っていた。しかし、私に向かってそんなことを言いかけた者はひとりもなかった。すると、いつものように黙っている私のところへ来て、ひとりの子供が話しかけた――

「あんた。誰書いたんや？」

その子は快活な口調で言った。それは教室で私のすぐうしろに居た子供であった。きさくな性質で、気むずかしげな私に対しては常から最も多く口を利いていた。彼に対して私は答えた――

「おれはあんたの名を書いたんじや」

その答えとともに、彼のはしゃいでいた顔は一刹那(瞬間)にがらりと変化した。しばらく無言だった彼は、やっと私に言った。

「こらえとおくれよ。のう、わあきやあんたをわすれたあつた。」

わあきやあ、ぎょうさんつれがあるさか」

二十年を経た今日、彼のその言葉を、私はそっくりとその田舎訛のままに思い出す。そうして私は彼のこの正直な一言に、今も無限の友情を見出すのです。ひよつとすると、これが私のうけた第一の友情ではないかとさえ思われるくらいです。

貴問に対して私は、仮に三四の名を挙げることも出来るでしょう。しかし、その人たちが数え上げた名のなかには私が無かった時に、彼らは私に対して、果たして、

「ゆるせ、友よ、予は君を失念しいたり。予は多くの友を持つが故に」

と、そうはつきりと私に言ってくれるだろうか。

2

(注) 快々…満足しない様子。ふさぎこんでいるさま。

問一 傍線部 a は「きょう」、傍線部 b は「こんにち」と読む。それぞれいつのことか。具体的に説明せよ。

問二 傍線部 ②「私は人に畏れられていた」とあるが、これは周りの子供たちが「私」のことをどのように思っていたということか。二十字以内で説明せよ。

問三 空欄 1 に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア くやし く イ はずかし く ウ うつとうしく
エ さびしく オ 恐ろしく

問四 傍線部 ①「各々の生徒たちが持っている友達を五六人数え上げよ」という「先生の質問」に対して、

(1) 「私」は何を書いたか、答えよ。

(2) 「きさくな性質」の少年は何を書いたと考えられるか、

答えよ。

問五 傍線部 ③「こらえとおくれよ。のう、わあきやあんたをわすれたあつた。わあきやあ、ぎょうさんつれがあるさか」と傍線部 ⑤「ゆるせ、友よ、く持つが故に」は、ほぼ同じ意味である。現在の共通語で言い換えよ。

問六 傍線部 ④「この正直な一言」とあるが、「彼」の発言を「私」はなぜ「正直」と思うのか。説明せよ。

問七 空欄 2 に入る、省略された一文を自分で考え、十字以内で答えよ。

問八 波線部「その時も私は今日と同じような不愉快を感じました」とあるが、友達を挙げよという問いが、当ても今日も「不愉快」なのはなぜか。本文に即して考え、「を自覚させられるから。」につながるように二十五字以内で答えよ。

六 次の文中の傍線部 ①～④のカタカナを漢字に改めよ。

絵や歌はセイライのシシツに左右されるうえに、フエテだという意識が加わると、本人が納得するような力はハツキできない。

歩くということ

かもく
寡黙なる巨人

著者 多田富雄

二〇〇七年七月三二日 第一刷発行

なぜ歩くことにこうもこだわるのだろうか。自分は障害者である。どうしても車椅子からは自由になれない。そうだとしたら、歩けなくてもいいではないか。もう半年も一歩も歩かずに生きてきた。歩くのを諦めたって生きていける。

苦しいリハビリを毎日しなくても、ほかに快適な生き方があるはずだ。電動車椅子に乗って動けばいいのだ、と思う人がいると思うが、そうではないのだ。どんなに苦しくても、みんなリハビリに精を出して歩く訓練をしている。なぜだろうか。

それは人間というものが歩く動物であるからだ。直立二足歩行という独自の移動法を発見した人類にとっては、歩くということは特別の意味を持っている。

四百万年前人類とチンパンジーが分かれたとき、人は二足歩行という移動法を選んだ。それによって重い脳を支え、両手を自由に使えるようになった。この二つの活動は互いに相乗的に働き進化を加速させた。歩くというのは人間の条件なのだ。だから歩けないというのは、それだけで人間失格なのだ。

その証拠に車椅子で町へ出てみよう。すべては人間が立った目線から眺めるようにできている。マーケットへ行っても、飾られた商品は車椅子からは見えにくい。下に並べられた魅力のないものばかりが眼に入る。町では人の顔さえも見ることがない。

ある日散歩の途中、交差点で信号待ちをしているとき、ためしに支えてもらい立たせてもらった。立って眺めた町の風景が、車椅子で見るのと、なんと違って見えたことか。私は立ったまま、その懐かしい風景に見入った。

思えば私たちは歩く目線で、地上にいろいろなものを作ってきた。看板一つでもそうだ。車椅子に乗ったままだと見落とすような看板が、立ってみればはっきりと眼に入る。家のつくり、道路標識、商店、みんな立って見なければ見えない。車椅子の生活が味気ないのはそのためである。



撮影・秋元孝夫

多田富雄(ただとみお)

1934年茨城県生まれ。東京大学名誉教授。免疫学者。千葉大学医学部卒。千葉大学教授、東京大学教授、東京理科大学生命科学研究所長を歴任。95年、国際免疫学会連合会長。抑制T細胞を発見。野口英世記念医学賞、エミール・フォン・ベーリング賞、朝日賞など内外の多数の賞を受賞。84年、文化功労者。能楽にも造詣が深く、脳死と心臓移植を題材にした『無明の井』、朝鮮人強制連行の悲劇『望恨歌』などの新作能の作者としても知られ、大倉流小鼓を打つ。2001年、脳梗塞で倒れ重度の障害をもつ。おもな著書に『免疫の意味論』(93年 青土社 大佛次郎賞)、『独酌余滴』(99年 朝日新聞社 日本エッセイストクラブ賞)、『脳の中の能舞台』(2001年 新潮社)、『露の身ながら』(柳澤桂子と共著 2004年 集英社)など多数。

